



狂犬と  、そして...



師走。

仕事をしているという意味では日常と変わらないはずなのに、なぜかこの時期はどこもかしこもせわしない。となれば多くのトラブルが起こり、それによってキヴォトスの治安を預かるヴァルキューレ警察学校にも様々なトラブルが持ち込まれる。

もちろん生活安全局、交通局、警備局の管轄が主たるもので、公安局は生活安全局に代わっての空き巣や放火などの見回りこそ増えるもののだいぶマシなのではあるが。

その中でヴァルキューレ警察学校の公安局長たる尾刃カンナは、自身のオフィスで書類の束とにらめっこしていた。既にその書類には自身による承認印が押されており問題のないはずのものではあるが、彼女は繰り返し細部に目を通し続けている。

彼女の様子を眺めていた副官は呆れたように

「姉御くまだそれ見てるんすかあ？」

と問いかけるが、彼女に目を配ることすらなく

「当たり前だ」

とにべもない返事。

書類の表紙には「コーギータウン年越しカウントダウンイベントに係る群衆誘導の警備計画書」とあり、ヴァルキューレ警察学校とカイザーセキュリティの印章が大きく印刷されていた。

「数年前に起きた春葉原ビデオ会館前群衆雪崩事故のようなことは絶対に起こしてはならない」

「そりゃそうっすけど……だからカイザーセキュリティもウチらも何度もチェックしたわけじゃないっすか」

数年前に起きた群衆誘導の失敗から起きた大事故のことはヴァルキューレ警察学校に通うものなら嫌というほど知っている。何度も何度も原因とその経過について教えられ、もうそらんじれる生徒も多いだろう。

もちろん、それだけ重大な事故だったということだが。

大型イベントの整備誘導にあたるのは第一義的にはカイザーセキュリティなどの警備会社だ。生活安全局や交通局、警備局などがそれをフォローはするが、主たる役目は彼らに一任されている。そしてその警備計画書は公安局で審理され許可をする。

なので最終責任は公安局長にあり、必要とあらば現場に着任し自ら指揮をする権限も有している。

「その通りだ。だから人手も配置も十分と判断して今回我々は年末年始の24時間を非番で過ごせるわけだ」

「でしょお？ だったら何が問題あるんすか」

「完璧な計画などありえない。書面上は完璧でも現場の隊員の質、群衆内にいる不穏分子の動向などで大きな問

題が発生するということはどうやっても消しきれない。それでも…」

「何か見落としがないかは確認するべきだってことすかあ…はー……………」

「こういうことは苦手か？」

「なんつうかえっと…、うん。いざとなったら『うりゃー！おりゃー！やったるぜー！！』って方が気楽っすが…」

「フツ…まあ来年になったら嫌というほどこの気持ちがわかる」

え！？と戸惑う顔を見せた副官に対して意地悪い笑みを返してカンナはようやくその書類をファイルに戻し始めたのだった。

「さあ、年末が非番なのは久しぶりだな…」

そうつぶやくカンナの声は、少し嬉しそうだった。

「お待たせしました」

「やあカンナ、先に一杯やらせてもらっているよ」

いつもの屋台。

そこに向かうとカンナの愛しい人が、頬を外気とアルコールで紅く染めてほほ笑んでいる。

「店主、私にはいつものを。…ありがとう」

特製ウーロン茶を掴みまずは乾杯。

ぐいとのに流し込むと、さわやかな口当たりと程よい苦みが広がり、思わず「くっ」と声が漏れてしまう。

「今年一年、お疲れ様カンナ」

「先生こそ今年一年本当にお疲れさまでした」

カンナにとっても想定外の一年だったが、おかげで新しい生き方を歩めている。そして愛する人にも出会え、まさか自分がこれほどまでに人を愛するような人間だったのかと気づかされる毎日だ。

もちろん、ふたりとも立場がありやるべきことが互いにある。当然毎日のように逢瀬を重ねることはできない。

だからこそ金曜の夜にこうしていつもの屋台、ふたりきりで杯を交わす時間がどれだけ心地よいことか。

別に愛を語るわけではない。情熱的な恋を求めるわけでもない。

ただ立場という重石を少し下ろした男と女が寄り添い静かに互いを尊重しあう。それだけでどれだけ満たされるものかは、この立場になってみないと分からないだろう。

まるで互いの中で欠けたパズルのピースを埋め合うように、落ち着いたときを過ごす。

「ええそうなんですよ、先日お話しした通り公安局は今回は非番でして。〇日からは生活安全局などが順次休みに入るのでその穴埋めをせねばならぬのですが」

「良かった。シャーレも三が日まででは休みだからね」

「そうなのですか？先生なら生徒さんが初詣などに誘ったりお忙しいのかと思いましたが」

「うーんでもさすがに元日におめでとうメール以外を届ける子は…いない、はず、だよ？うん多分…きつと」

「先生：先日の〇〇月を失くしてしまおうと爆弾テロを企てたゲヘナのテロリストの件もそうですが、あまり犯罪者に肩入れしなすと巻き込まれて罪を犯すことになりますよ？」

「あっはははは…」

笑ってごまかせば済む問題ではないのだが、それもこの人が背負う『教師』という職責ゆえのことなのだろうとカンナはため息をつく。

「先生の取り調べをする、などという日が来なければ良いのですが」

「うん、気を付けるけど…うん…ゲヘナの子とか特に悪い意味でも思い切りが良い子が多すぎてね…」

「ゲヘナは一体何を教えてるのやらと思ってしまいます。各学校のカリキュラムに注文を付ける権限はヴァルキューレはもとより連邦生徒会にもないのですが」

「自主性をはぐくむには良いのかも知れないけれどね…」

「育むどころか育ちすぎて無法者の集団になってると言っではいけないのですか？」

カンナのように秩序を重んじ、理不尽な暴力や悪意から人々を守らんとする人間には理解しがたい学校なのだろう。けれども、と先生は思う。

「そうだね、彼女たちは常に自らの欲求の下に社会常識や法律を置いている。彼女たちが法律を口に出すのは自分の立場が悪いときだけだ。それだけを見れば正直悪人であると断じてしまっても良いんだろうね」

「しかしそうではないと考えておられる？」

「何かをしようと決意したときの彼女たちのひたむきさは凄いのよ。一致団結して一直線に目標へ向かってゆく。物事の可能性を考えすぎてついつい遠回りしてしまうミレニウムや、どんなときでも政局が頭をよぎってしまうトリニティにはない特徴だね」

「その結果がテロや犯罪になっても？」

「それは彼女たちが今まさにこの瞬間学ぶべきことだと思うな。そのために私も微力を尽くしたいんだ」

「なるほど…本当に先生はお優しい…」

そんな人だから自分も救われたのだが、ここまでお人好しで大丈夫なのだろうかといふ不安になってしまう。

わずかに身体を寄せて、

「ですが、だからこそ危険も多いのです。先生は私にとってもその…大切な方ですので…」

「大丈夫。カンナを悲しませるようなことはしないよ」

「そう、ですか…」

——ウソだ。

いや、嘘ではないかもしれないが、いざとなったら生徒のためにどんな死地でも飛び込んでゆく。それが自分の愛した男だとカンナは知っている。

「本当に…本当に困った方だ」

「うん？」

「そんなことを言われたら、その証を欲しくなってしまうのではないですか」

そつと清酒を傾けるその手に触れる。

こちらを振り向いた男の視線が、女と交わる。——数秒の沈黙。そして

「実はもうホテルを取ってあるんだけど」

「…もう少しロマンチックな言い方をしてください」



「ごめん、気の利いた返しが思いつかなくて」

「はあ…店主、お勘定を」

「あ、私が払うよ」

「——いえ、折角部屋を取っていただいたのですから、ここくらいは出させてください」

あまり貸し借りがあるとお互い重くなってしまうからと、カンナは小さく微笑んだ。

「これは…壮観ですね」

値段のことをいうのは不作法なのでこらえたが、明らかに一等室といえる部屋だった。ガラス張りの浴室は一面D.D.の夜景が広がり、ふたりで入っても十分な大きさのジャグジーが鎮座している。

「どう？ 気に入ってもらえたかな」

「はい…人気のお部屋なのは？ 良く予約が取れましたね」

「実はこの間便利屋の子たちを手伝ったときにこのオーナーと知り合ってたね」

「なるほど、それですか」

尾刃カンナと先生はふたりジャグジーに並んでつかりながら夜景を眺めていた。その街並みを眺めていると、どうしても今も働いている仲間のことが頭をよぎってしまう。

「今頃生活安全局の子たちは徹夜で勤務に当たっているのでしょうか…いえ、野暮ですね」

「カンナたちは今しっかり休んで、それで〆日に彼女たちの代わりになってあげれば良いんだよ」

「……………しっかり休めますか？」

「ハハハ…」

今夜は寝れるのだろうか。

カンナも、先生もそんなつもりはさらさらない。後はただ心と身体をつながり確かめるだけだ。

「——まあ、休むのは元日の昼からということで」

「はい」

ジャグジーの中、ふたりの影が重なった。

「あふ…うん…あああ…」

「うーん、やっぱり大きい…」

ジャグジーの中、カンナの後ろに回り込んだ先生は、その豊かな乳房に手をまわしてこねくりまわす。指でいやらしい弧を描くたびに乳房がたわみ、ひしゃげる。すると乳房が弾けて先生の指を押し返した。

男ならば誰しも夢中になるその感触を味わっているだけで勃起するのが分かる。そうして何度も弾力を楽しんでいると、カンナが吐息を漏らしながら

「その、恥ずかしい、です」

と見つめてきた。

「ダメ、これからもっと恥ずかしいことをするんだから」

「ん…こういうときの先生は、意地悪、です…!」

「そうかな。カンナだってノリノリなときは結構意地悪だと思うけど」

「それは…先生が、あああ!？」

カンナが先生の腕の中でびくんびくんと身体を震わせる。

快感からカンナが背後の先生に体重を預けると、彼の勃起したペニスの感触がじかに伝わる。

「せ、先生…」

「カンナが魅力的すぎてもうこんなになっちゃった」

「そうですかそれは仕方ない、ですね…では」

カンナが腰を動かすとお湯の中であつても器用にその尻肉に挟まれたペニスがしごかれる。

「当たっています、ん…水の中なので…いかがですか？」

「もどかしさはあるけど、そう…気持ちいいよ」

「良かった、ふっ、ん…こう、ですか？」

鍛えているからだろう。適度に引き締まった尻は弾力と硬度を兼ね備えていて、それが程よい刺激として先生の肉棒を熱してゆく。

その背後から再び乳房をもみしだくと、カンナが身体を左右によじった。

「んあ、ん、そこ…」

水音を立てながら乳房を搾るように力を入れると

「あアアアン！！！！」

感じ過ぎてしまったのか身体を反らしてカンナが喘ぐ。先生はカンナの乳房の下に手を入れるとその質感を楽しむ、水の中だとよりしっかりと感じられるその質感は男の劣情を煽るには十分すぎる質量を備えており、これを今自分がほしいままにしているということがオスの支配欲を強く刺激する。

それはカンナを昂らせているはずの先生自身を興奮させるには十分すぎる刺激だった。

「カンナ、そろそろ…」

「はい私もいつでも構いません…」

そう言葉を交わした瞬間、先生はカンナの身体を持ち上げると、背後から抱きかかえるように自らの熱い肉の塊を十分に熱された密壺の中にめり込ませていく。

「ッ！」

「あつ、アアアア！！！！入って…んんんっ！！！！！！」

ぐん、と突き上げると重みで背もたれからずり落ちそうになり、その勢いでカンナの身体だけが湯の上にせり上がる。無理な体勢なのは承知で思い切りそのまま腰を浮かすと、深いところに当たるのかカンナは大きく声をあげた。

「んおおおおお、くううう、ああ、ふ、深いイイイイイイイ！！！！」

「ど、どうかな！？」

「そのまま、乳房も、乳房も揉んでください」

——無茶な注文をしてくれる。

ただでさえギリギリの姿勢なのである、ここで手を乳房にまわすのがオフィスに入り浸っている男にどれだけ大変なことか。

だが、そんな言い訳をするのは男としてみつともない。先生は気合を入れて乳房をわしづかみにする。すると、カンナの身体がさらに大きく跳ねた。

「はあああん、そうもつと揉んでくださ…いいいいい！！！！！」

掴むとカンナの乳首が大きく隆起しているのが分かる。それを目安として乳房を手でむさぼると、こぼれるバストが踊り、もちもちとした触感が官能を伝えてくる。

「あッ！そこ、ンンんんん！！！！！」

ねだるように身体をよじるカンナに応えて両手にありったけの力をこめる。

「うううんん！良い、良いです…くああああアアアア！？」

「ぐっ、カンナ…」

先生の上で踊り狂うカンナの膺壁が彼のペニスをぎゅうぎゅうとしめつけ、まるで自分がバストを味わうのにシンクロしているかのよう。

その痛いほどの快楽に思わず男もうめいてしまう。

「くあああ、イってしまいそうです…！」

「カナ、私ももう……」

「ああああ……うん！ええ、来て下さい……！このまま、このままアツ！！！」

その言葉をきっかけに先生は腰を大きく引き、思い切り打ちつける。

「あアん！そこお、そこを突いて、もつと揉みしだいて、ふあああああ！！！！！？？？？」

甘い声がバスルームに響く。そして視線の奥では夜景が輝いている。目の前の痴態と夜景のミスマッチが男の背徳感を高めているが、それはカンナも同じようだ。

男の上で顔を真っ赤に染めて大きく口を開いてわなないた。

「ここで、こんな、こんなことをおおお……わ、私はなんて……いやらしい……ひいひいひい！ダメ、も、も、も、う！！！！！」

「カンナ！！！！」

「ひいひいひい、そのままそのまま私をお、ああアアア！！！イ、くううううううう！！！！ひああアアアア！！！！！！！！！！」

乳房を掴まれ、貫かれた姿勢のままカンナが痙攣する。そこに先生の精液が堰を切ったように放たれ、一気に





彼女の膺を満たして子宮へと注ぎ込まれてゆく。

「あつ、ああ…はあ…すごい、こんなに出て…」

「——はア…ん…ふう…あああ…」

絶頂の余韻にうめき声をもらして荒い吐息。

一発目のもつとも濃厚なザーメンを出し切った先生も熱気と疲労から大きく息を吐いて、意識を保つべく頭を振った。

「ふふ…お腹が熱いですよ。それだけ、出してくれたのですね…」

立ち上がり、満足気にお腹を押さえながら振り返ったカンナは男の疲労に気付いたようだ。優しく微笑むとジヤグジーに膝立ちになり、

「先生、のぼせてはいけません。ジャグジーの縁に腰かけてください。ほら、そちらにレモン水も置いてありますからいただきますよう」

さすがはホテルだ。気の利く位置にレモンの入った水のタンクがあり、コップが添えつけてある。